

弟子になるには、了見が問題

上から読んで下から読んでも構わ
構。このお名刺、失礼ながら、とんつ
まりの後小読みだとしてもある。さきに
当方、「右橋、うきつ、深きつ流みつ
ですか」とついで口を滑らせたが、右橋
さんは、「キョウキョウ、行きつ戻りつて
かむ」と軽く返した。

生まれも育ちも下谷・稲荷明界隈だ
から、生粋の下町っ子である。近所に
は、林家彦八師匠が長屋住まいをして
いた。上野鈴本までは歩いていける師
業。近くの下谷神社は、江戸で寄席の
興行がはじめて開催された場所とい
う。

昭和7年の生まれで、小学生のとき
からの落語好き。中学校の文化祭では
寄席の研究発表をした。その際、黒板
に書いた文字が「それらしくない」と
批判された。なぜ寄席風の字で書かな
いのが、とこのうである。

これがくやしくして、文学の資料を集
めるようになった。青山学院大学に進
学して、落語研究会に入ったり、「寄
席文学勉強会」が月一度あり、教えて

くれるのは橋右近だといつづつ、さっ
そへ参加した。

当時(昭和40年代の半ば)、右近は社
文案のすすめて橋流寄席文学研究会を名
乗るようになって数年が経っていた。
テレビ番組の題字なども手がけて、同
席に魅かれる者たちで知らない者は
いないほどのビッグ・ネームであっ
た。

弟子下りしていったさ。大学一年生の
中村泰士くん(右橋さんの本名の原)に
、「師匠は「勉強会」に通って来て、技
術もそれこそにならないといけない
が、ア見を見せながら」と言えた。

このア見といふヤツが、藝事の世界
では大分なのである。師匠を追っかけ
追っかけて、周りには気配りを十分に
し、先輩にも気に入られるようにかん
ばる。いちばんのポイントは心懸気。
あるときは自分を犠牲にして多くをこ
ともしなくてはならない。指指勘定だ
けで動くかたくな、ア見の狭い人間は嫌
われる。

大学の先輩に、現在の三遊亭家太郎
師がいる。家太郎師は、卒業を間近に
控え、落語家になる決心をしかかっていた。

子どもを生ののはじりやめにしてしま
う、未世とがトメとあじけたのに、さ
らに妹や弟が生まれてきてしまふ。そ
んな話が落語の世界にはほめてらるに
いぬ。

落語家にならないワケ

「いかに、どうなんでしよう。寄席
文学を聞いて、楽屋にも出入り。それた
け落語がお好きなら、いつそ落語家にな
ったらよかったですじゃありませんか」
無遠慮な質問に、右橋さん、大きく
うなずきながら、「こう答えた。

「そう思われるでしょうね。でも、
そうではないのです。お弟子になるべく、
その師匠だけに仕えることになりま
す。ところが、私たちがよく聞か
落語を支える立場にいれば、どんな大
徳所でもお付合いさせていただきます
になります。ま、自己満足ですけどね」

橋右近の最初の弟子は、橋左近と言
う。また寄席文学という言い方もなく
て、右近は、力任せに寄席看板を書き
まわっていたころであった。はじめは、



るたびに、この後輩を喫茶店に呼んだ。
その際、「俺、落語家になろうと思っ
ただけでいいかな」「さっさと来たさうぞ」
「そうかな」とこの会話、ふたりの
間におかれた。

結果、先輩が落語家になったおかげ
で、後輩の中村くんも気楽に寄席の楽
屋に入内でき、この世界の空気に早
く馴染めた。こういうア見が必要なの
かも肌身でわかった。おかげで、大学
を卒業する直前に、家元から正式にワ
番目の弟子と認められて、橋右橋の名
前をもつことができた。

「自分なんかのところに弟子入り志願
だなんて、なんだらう」と思った。だ
から、後のことをなにも考えず、「
右近の弟子だから左近だと、軽い気持
ちで名前を与えたのであろう。昭和38
年のことである。

この左近さんは、これまた「狂」の
字がつくような落語好きで、大学生の
ときに古今亭志ん生の追っかけをして
いた。後に落語家の系図をテーマにし
た本を書くことになる研究者でもあ
る。

一番弟子の右京さん(一筋樂ではい
かない。もともとは横浜国大付属高校
の国語の先生だったといふ)。定年で教
壇を去ってから、右近の弟子になった。
現在94歳で、襲名としてお元氣。

なお、右近は平成7年に、92歳でこ
の世を去った。その4年前には、勲五
等瑞宝章という勲章も受けて、まさ
に功成り名を遂げた。

「いなる前に」弟子たちを集めて、
家元をだれかひとりに継がせるともめ
ていなるからいけないという考えか
ら、橋流としてみんなでがんばりなさ
いと告げた。その結果、家元は初代の



豊洲文化センター「助平洋教室」風景